令和４年度自己評価計画書（最終評価）

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策等）
1 不断の授業改善により、生徒の主体的な学びを高め、３年間・５年間を見通した学力・技術の向上を図るとともに、国家試験全員合格を目指す。	① ＩＣＴ機器を活用したり、授業形態を工夫したりすることで生徒の主体的な思考を促す。	「先生は、考えたり、表現したりする機会を設けている」 と評価した生徒の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満　である。	先生は考えたり、表現したりする機会を設けていると評価した生徒の割合 １年生　８３．６％ ２年生　８０．７％ ３年生　８４．１％ 専攻科　９８．０％ 全　校　８６．１％ 評価　Ａ	中間評価と比較し１年生 1.8%、３年生 3.4%、専攻科 1.8%、全校 1%肯定評価が増加した。２年生は 1.8%肯定評価が減少した。クロームブックを活用し、調べた内容を考察する機会や、思考した内容を表現する場面を設けた。今後、課題解決型の学習や生徒間の学び合いを積極的に取り入れる。ＩＣＴ機器の利活用を一層推進するとともに、ＩＣＴ機器の活用と学力の向上との相関関係を検証する。
	② １人１台端末を活用し、主体的な思考を促す発問や学習課題を提示することで自ら学ぶ意欲を高める。	「ＩＣＴを活用することで自分の学力は向上した」 と自己評価した生徒の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７５％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満　である。	ＩＣＴを活用することで自分の学力は向上したと自己評価した生徒の割合 １年生　５９．７％ ２年生　７８．５％ ３年生　７７．９％ 専攻科　９１．３％ 全　校　７７．３％ 評価　Ｂ	中間評価と比較し１年生 4%、２年生 2%、３年生 11%、専攻科 5.3%、全校 5.5%肯定評価が増加した。調べ学習、プレゼンテーション、事前課題配付、事前事後アンケートなどクロームブックを活用した授業が増加している。しかし、１年生の肯定評価が他学年と比較し低い。主体的に学ぶ態度を育成するために、生徒の興味関心を喚起する学習課題を提示する。また、ＩＣＴを活用した思考場面を意図的に設定するなどの改善を図る。
	③ 専門教科の知識・技術の確実な定着を図るため、目標レベルに達するまで補習・個別指導を実施する。	偏差値４０未満の生徒が Ａ　０人 Ｂ　１～２人 Ｃ　３～４人 Ｄ　５人以上　　である。	＜１年生＞ 偏差値４０未満の生徒が ５人　評価　Ｄ	＜１年生＞ ２月の全国模試（５年一貫校）では、基礎医学 49.7、基礎看護 55.9 であり、偏差値 40 未満の生徒が５人となり、例年に比べ増加している。個々の学習習慣の確立やクラス全体で学習に取り組む環境づくりが十分でなかったことが要因として挙げられる。２学期より学習に取り組む姿勢に変化が見られているが、週課題や朝学習など年間を通して学習に取り組み、強化していく必要がある。

				＜２年生＞ 偏差値４０未満の生徒が ３人　評価　C ＜３年生＞ 偏差値４０未満の生徒が ３人　評価 C	＜２年生＞ ８月の全国模試（５年一貫校）では、学校偏差値 60.1、基礎医学 58.3、基礎看護 60.1 であったが、２月の全国模試では、学校偏差値 56.8 と低下し、分布も二極化している。個別に応じた学習支援を強化していくとともに、全体の底上げを図っていく。 ＜３年生＞ ８月の全国模試の結果、人体の構造と機能は 9 位/84 校中、偏差値 58.2、基礎看護は 27 位/54 校中、偏差値 50.1 であった。２月の全国模試では、偏差値 40 を下回る生徒はいなかった。今後も個別に応じた学習支援を強化していく。
			＜専攻科１年生＞ 偏差値４０未満の生徒が A　０人 B　１人 C　２人 D　３人以上　である。 ＜専攻科２年生＞ 偏差値４０未満の生徒が A　０人 B　１人 C　２人 D　３人以上　である。	＜専攻科１年生＞ 偏差値４０未満の生徒が ０人　評価 A ＜専攻科２年生＞ 偏差値４０未満の生徒が ０人　評価 A	＜専攻科１年生＞ 12 月に行った全国模試（基礎学力）の結果は、3 位／111 校中、偏差値 60.6 と高く、偏差値 40 を下回る生徒はいなかった。しかし、50 未満が１人おり、今後も基礎的な知識の定着と個別に応じた学習支援を強化していく。 ＜専攻科２年生＞ 12 月に行った全国模試の結果は、10 位／761 校中、偏差値 60.1 と高く、偏差値 40 を下回る生徒はいなかった。しかし、偏差値 50 未満が４人、必修問題正答率８割未満が１人おり、弱点科目に対する全体補習や個別指導を強化した結果、看護師国家試験に全員が合格した。

	④	＜1年生＞ 課題提出の期限を守ることができていない生徒に対して個人面談を実施し、期限内に課題を提出できるようにする。 ＜2年生＞ 毎日の課題をチェックすることで、家庭学習を習慣化する。 ＜3年生＞ 分野ごとの小テストや個別指導を実施し、専門知識の確実な定着を図る。	＜１年生＞ 課題を提出する生徒の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満　である。 ＜２年生＞ 家庭での学習時間が昨年より０．５時間増加した生徒の割合が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満　である。 ＜３年生＞ 国家試験演習及び国家試験の個々の得点率６５％以上の生徒の割合が Ａ　１００％ Ｂ　９５％以上 Ｃ　９０％以上 Ｄ　９０％未満　である。	＜１年生＞ 課題を提出する生徒の割合が　９５．９％ 評価 Ａ ＜２年生＞ 家庭での学習時間が昨年より０．５時間増加した生徒の割合が ９月　６４．５％ １０月　３８．７％ １２月　９．０％ ２月　２２．６％ 評価 Ｄ ＜３年生＞ 国家試験演習及び国家試験の個々の得点率６５％以上の生徒の割合が １００％ 評価 Ａ	＜１年生＞ 中間評価が 95.6%であったため 0.3 ポイント上昇した。中間評価の時点で、課題の提出自体はできるようになってきたため、課題を発展的内容にしたところ、期日に提出できない生徒が出てきており、100%を達成できていない。今後は、２年後の国家試験の準備として、現在の課題レベルを落とすのではなく、学習を進めていくようにする。 ＜２年生＞ ９月は 64.5%、１０月は中間評価と同じ 38.7%、１２月は新型コロナ感染症の影響で学習環境が整っていなかったため 9%だった。早期から学習習慣の重要性を知らせることや課題の提供と回収を徹底するなどの対策をとり、家庭学習が定着するようにする必要がある。 ＜３年生＞ 国家試験演習では、得点率 65%以上の生徒の割合が少しずつ増えてきていたが、100%にはならなかった。しかし、個別指導とクラス全体で支え合う体制を強化し、精神面のフォロー（不安対策）なども行った結果、国家試験は全員が得点率 65%以上で全員合格を果たした。今後も一人ひとりの生徒分析を行いながら、知識の定着と精神面の安定を図っていくことにより、全員合格に繋げていく。

学校関係者評価委員会の評価	１年、２年次の家庭学習状況が気になるが、国家試験が近づくと学習効果が上がってくるのがわかる。模試の結果も素晴らしい。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策	進級前に進路講話や個人面談を実施し、自覚と意欲を持って家庭学習に取り組むことができるように関わっている、今後も続けていく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策等）
2 本校の学びを通して、看護師・介護福祉士に求められる健康な心身とコミュニケーション力の育成を図る。	① 「田鶴浜高校いじめ防止基本方針」に基づいて、いじめのない学校作りを推進する。	生徒アンケートで「互いの人格を尊重し、いじめを絶対に許さないという意識」について、「大いに高まった」と「高まった」の回答が Ａ ９５％以上 Ｂ ８５％以上 Ｃ ７５％以上 Ｄ ７５％未満　　とする。	９月の生徒アンケートで「大いに高まった」「高まった」と回答した人の割合は ９５．６％　評価　Ａ 「大いに高まった」 ５８．３％ 「高まった」 ３７．３％	「意識が高まった時はいつか」の問いに、授業が 101 名（53.3%）、講演会が 89 名（45.6%）の生徒が回答している。 「意識が高まらなかった」の理由には「いじめに触れることがなかった」「意識は元々高い」と９名が回答している。 １学期には、１年生を中心に様々な講演会を開催し、相談しやすい環境作りからいじめの未然防止を図った。今後も相談課や保健課と連携を取りながらいじめの未然防止を進める。
	② 立ち止まって丁寧に挨拶をすることができるよう継続指導する。	保護者アンケートで「立ち止まって挨拶している」の回答が Ａ ９０％以上 Ｂ ８０％以上 Ｃ ７０％以上 Ｄ ７０％未満　　とする。	１２月保護者アンケートで「立ち止まって挨拶している」と回答した人の割合は 68.4% 評価 Ｄ 「わからない」 22.4% 「できていない」9.2%	２年度は 87.1%（Ｂ評価）、３年度は 74.3%（Ｃ評価）という結果となり、「立ち止まっての挨拶」への取組の見直しが喫緊の課題と考えている。コロナ禍での挨拶指導ができていなかったことが要因として挙げられる。生徒が「丁寧な挨拶」の意義を理解し、積極的に実践するような環境作りとその指導を行っていく。
	③ 運動行事の事前練習やケガ予防、放課後活動の活性化のため、合同部活動を実施する。	合同部活動後のアンケート結果で満足と答えた生徒が Ａ ８０％以上 Ｂ ６０％以上 Ｃ ５０％以上 Ｄ ５０％未満　である。	事後アンケートで「活動内容が満足できたか」について、肯定評価した人の割合 ７８％ 評価　Ｂ	９月はドッジビー、１２月はドッジボールで実施した。事後アンケートの結果から、多くの生徒が活動を楽しみながら、満足感を得ることができていたことがわかる。また、運営を生徒会執行部が主導して行ったことで、合同部活動後の鶴友祭や球技大会の運営にも活かすことができていた。 次年度も継続実施を検討しているが、実施目的や運営方法、実施種目等を工夫・検討していく。

	④	心身が健全で粘り強い生徒の育成を目指し毎授業で３分間走、サーキットトレーニングを行う。	１・２年生は20mシャトルラン、３年生は３分間走の記録を比較。秋の記録が春より向上している生徒が Ａ　８０％以上 Ｂ　７０％以上 Ｃ　６０％以上 Ｄ　６０％未満　である。	１年生　３３％ ２年生　２１％ ３年生　３５％ 全学年　３０％ 評価　Ｄ	昨年度から継続して、毎授業で３分間走とサーキットトレーニングを行ってきたが、今回の測定において、記録の向上がみられた生徒の割合は30%であった。しかし、記録が大幅に減少した生徒は少なく、現状維持の生徒が多かった。 今後は、３分間走やサーキットトレーニング内容の再検討や体力向上への動機付けを高められるような支援を行っていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	学校を訪問する機会がなく、校内の生徒の状況はわからないが、町中での生徒の挨拶は素晴らしい。小学生がお手本としている。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策	挨拶など、基本的生活指導を学校全体で実施していく。より健全な人間性を育み、医療福祉を担う人材育成に努める。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策等）
3 本校の特色ある教育活動や、地域の医療・福祉を支える人材の必要性等の広報に努め、志願者の増加を図る。	① 体験入学、学校説明会の内容を充実させるとともに情報誌、ホームページ、ＩＣＴなどを活用し本校の教育活動とその成果の広報を強化する。	一般入試の志願倍率（学校倍率）が１．００倍を Ａ　上回った。 Ｂ　同程度だった。 Ｃ　下回った。 Ｄ　大きく下回った。	衛生看護科　１．２７倍 健康福祉科　０．２７倍 ０．７２倍 評価　Ｃ	衛生看護科は昨年度と比較し 0.14 倍増加したが、健康福祉科は定員を満たすことができなかった。 看護師・介護福祉士の専門職としてのやりがいや、本校が地域の医療・福祉に貢献する人材を育成している点を説明した。しかし、介護・福祉に対する具体的なイメージや将来性を伝えきれなかった。 本校での学びや生徒の生き生きとした様子、進路が伝わるように、ホームページ、各種説明会の説明内容の充実を図る。また、医療・福祉関係機関との連携を検討する。
	② ホームページ、産業教育フェア、体験入学、学校説明会、出前授業、生徒の母校訪問などを通して、衛生看護科の魅力を発信する。	体験者アンケートで「５年一貫教育による看護師養成教育の理解が深まった」の回答が Ａ　９０％以上 Ｂ　８０％以上 Ｃ　７０％以上 Ｄ　７０％未満　　である。	学校説明会でのアンケートで「５年一貫教育による看護師養成教育の理解が深まった」と肯定評価した人の割合が １００％ 評価　Ａ	学校説明会（7・11 月）への参加者 239 名のアンケート結果、「大変理解が深まった」203 名（84.9%）、「だいたい理解が深まった」36 人（15.1%）であった。 感染状況により母校訪問は実施されなかったが、今年度は３年ぶりに産業教育フェアが開催された。また、産学連携人材育成事業の取り組みが新聞等に掲載され、本校の特色を知っていただく機会となったと考える。今後も看護科のホームページ等を通して、５年一貫教育の理解が深まるよう看護の魅力発信に取り組んでいく。
	③ 情報誌やホームページによる本校の情報発信に加え、ＩＣＴを活用した健康福祉科の教育活動や魅力の発信をする。	体験者アンケート等で、「健康福祉科に対する理解が深まった」という人数の割合が Ａ　９０％以上 Ｂ　８５％以上 Ｃ　８０％以上 Ｄ　８０％未満　である。	体験者アンケート等で、「健康福祉科に対する理解が深まった」という人数の割合が １００％ 評価　Ａ	体験入学のアンケートでは、「十分に理解深まった」が 86.7%で、「理解が深まった」を含むと肯定評価は、100%であった。生徒による学科説明や手話体験、点字体験などを実施したことで理解が深まったと考える。一方、体験入学の参加人数が減ってきており、志願者の増加には繋がっていないと思われる。今後は、在校生の取組を紹介するなど、小・中学生が興味を持つ内容の情報提供を行っていく。

学校関係者評価委員会の評価	健康福祉科の定員割れは深刻である。介護以外の道があることや福祉の良いところをアピールすべき。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策	ホームページで学校の様子、生徒の活躍を載せるようにしている。より本校の魅力が伝わるよう工夫し情報発信していく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果	分析（成果と課題）及び次年度以降の取り組み（改善策等）
4 ＧＩＧＡスクール構想に基づいた教職員・生徒のＩＣＴ活用を定着させるとともに、業務の効率化を進め、多忙化の解消に努める。	① 時間外勤務を減少させるため、ＩＣＴ活用の定着を図りながら業務の効率化を進める。	具体の取組を積極的に進め、一月あたりの時間外勤務時間が４５時間未満の教員の割合が、 Ａ　７５％以上 Ｂ　６５％以上 Ｃ　５５％以上 Ｄ　５５％未満　である。	一月あたりの時間外勤務時間が４５時間未満の教員の割合が ７０．９％ 評価　Ｂ	昨年度の割合は 68.0%であり、今年度は若干改善が見られた。業務の効率化の意識が浸透しつつある一方で、固定化された教員が長時間勤務している実態が見られた。次年度に向けて組織ごとに業務の平準化を推進するよう働きかけていきたい。

学校関係者評価委員会の評価	中学校では部活は地域に任せるようになってきている。高校も工夫を。
学校関係者評価委員会の評価を踏まえた今後の改善方策	ＩＣＴ活用定着と共に教員の勤務改善に繋げていく。